

むかし

ひとりの旅のお侍が、日の暮れがたに、村に来て、一軒のお百姓の家の戸をたたきました。そして、

「今夜ひと晩、泊めていただけませんか」とたのみました。すると、お百姓は、

「うちは貧乏で、泊めてあげたくても泊められない。でも、このむこうにお寺があります。化け物が出るといので住む人もなく、空き家になっております。そこへ行ってお泊りなさい」といいました。お侍は、

「では、そのお寺に泊まって、化け物の正体を見とどけてあげましょう」といって、ひとりで化け物寺に行って泊まりました。

いまに何が出てくるかと思いいながら待っているうちに、夜がだんだん更けて来ました。とつぜん、東の方から、大きな光る物が、てかあんてかあんと光って飛んできて、お寺の縁側にどたと下りました。そして、

「そくへいたんはおるか」といいました。お侍は、

「そういうおまえは何者だ」とききました。

「おれは、東原の馬頭だ」

「ふうん。東はひがし、原ははら、馬頭とは馬の頭の化け物だ。そんなものが怖いようなおれではない。帰れ、帰れ」とお侍がいうと、そいつは、またてかあんてかあんと光りながら行ってしまいました。

しばらくすると、こんどは、西の方から、大きな光る物が、てかあんてかあんと飛んできて、縁側にどたと下りました。そして、

「そくへいたんはおるか」といいました。

「そういうおまえは何者だ」

「西竹林のさいじょっけい」

「西はにし、竹林は竹の林、さいじょっけいとは鶏の足の化けた物だ。そんなものが怖いようなおれではない。帰れ、帰れ」とお侍がいうと、そいつは、またてかあんてかあんと光りながら行ってしまいました。

すると、こんどは、南の方から、大きな光る物が、てかあんてかあんと飛んできて、縁側にどたと下りました。そして、

「そくへいたんはおるか」といいました。

「そういうおまえは何者だ」

「南海の大魚」

「南はみなみ、海はうみ、大魚とは、大きな魚の化けた物だ。そんなものが怖いようなおれではない。帰れ、帰れ」とお侍がいうと、そいつは、またてかあんてかあんと光りながら行ってしまいました。

すると、こんどは、北の方から、大きな光る物が、てかあんでかあんと飛んできて、縁側にどたと下りました。そして、

「そくへいたんはおるか」といいました。

「そういうおまえは何者だ」

「北池のひき」

「北はきた、池はいけ、ひきとは蛙の化けた物だ。そんなものが恐いようなおれではない。帰れ、帰れ」とお侍がいうと、そいつは、またてかあんでかあんと光りながら行っ  
てしまいました。そして、それっきり、もう何もやって来ませんでした。

あくる朝、お侍は、化け物たちが呼びに来た「そくへいたん」というやつが、このお寺の中にいるにちがいないと思って、さがしてみました。すると、縁の下に古い下駄の、鼻緒の切れたのが片方、落ちていました。

「足はあし、平は、たいら、端はきれはし。そくへいたんとはこいつにちがいない」  
お侍は、そう考えて、古下駄を焼いてしまいました。

それからは、化け物は出なくなったということです。

おしまい

原話：『昔ばなし』岩崎清美／信濃郷土出版社

再話：村上郁